子育てで常識と思われていることなどきちんと立ち返る

育児の仕方って時代とともに変化していくものなんですよね。その育児について、今回は抱き癖について話させていただきます。
抱き癖とは、本来欧米で主流であった育児方が、変化して日本に伝わったものなんです。

18世紀半ばを過ぎた頃から、イギリスでは産業革命が起こりました。産業革命は国が発展する大きな革命ですね。そんな中女性の社会進出が盛んに増え始めたため、女性の心身の負担を軽減することを目的にこんなことを提唱する学者さんがいたのです。
子どもは別室で寝かせ、あまり手をかけてやらない方が良い。
その方が、子どもは自立するものだと。それまで重視されていた 愛情たっぷりかける事 が非合理的だと言われ始めたのです。

産業革命はイギリスを皮切りにベルギー、フランス、アメリカ、ドイツ、ロシアといった風に起こりついに日本にもその波が押し寄せられ、抱かない、触れない育児法は日本でも明治から戦後にかけて大きく影響しました。
日本の伝統的な1日の多くの時間を肌を密着させて過ごすべったり育児は、西洋医学の輸入とともに「抱き癖」と言う言葉に変化していったのです。言葉を自由に操れない乳児が泣く事は、何らかの要求をしているサインです。そのほとんどが「抱っこしてほしい」と言うこと。
いまだに根強く残っている「抱き癖」。時代とともに育児法は変化し今は抱き癖は死語になりつつあります。

さて、「抱かない・振れない育児法」で育った欧米の子供が大人になったら、どうなったのか…
人を殺めたり、横暴であったり、社会的人格が欠如しているとも捉えられる人たちが、ある年代を中心に増え始めたのです。なぜなのか?それを検証していく学者さんがいたのです。
もう、ここまできたら皆さんもなぜだかお分かりになりますよね?そうです。産業革命時代に提唱されていた育児法に原因があるのだと。
抱っこしてあげる・抱きしめてあげる事は、「やり過ぎ」なんてないのです。「もういいよ、ママ」と言われるまで、いくつになっても、もっともっと抱きしめてあげましょう。
あなたのお子さんも、もっともっと抱きしめてって、きっとお母さんを求めていますよ。